

学生の頃から、とくにこれと言って目的のない旅に出たかった。多くのことに疲れている自覚をして、今しかないと確信した。まず、飛行機で南へ飛んだ。着いてから思いついた。飛行機以外の移動手段を用いてアパートに戻ってみよう、と。

そう思ってから二日後、俺はようやくと本島に戻った。さいわい、船酔いはしなかった。ただ、しばらく海と魚と日本酒はいいや、という気になる。

埠頭に立ち、海とは反対の方を見る。つまり町を見た。

山麓の町だった。裾野が広く、横にも大きな山の輪郭に沿うように町はあり、様々な色に塗られた家々が被り切らないその様は、まるで絵画のようだった。両手の人差し指と親指で視界を四角に区切ると、やはり絵画のようだと思った。

「……………」考えて、決めた。

「今日一日、ここを観光しよう」

目的のない旅は自由なのだ。

その判断は正しかった。

パンとチーズの店で朝食にありつき、猫とたわむれ、ホームレスとだべり、教会を観光し、学生らの催す合同個展で絵を鑑賞し、美人に声をかけてふられ、空を見ながらあちらへこちらへ歩き回り、当然迷子になり、ヤカラに絡まれては逃走し、逃げ切れたかと思えば野犬に追われ、野犬をヤカラに押し付けて見事逃げ切った頃には昼を迎え、栄える通りの方に向かおうとする家族で営んでいるらしいチキンの屋台で昼を済ませ、通りには戻らずにそのまま坂を上って山へ向かった。

そして今。いつの間にか足元の石畳は土に、周囲の風景は建造物から自然に変わり、通りの形に区切られていた青空は際限なくどこまでも広がっていた。あるところであと立ち止まり、歩いて来た方を見返した。

「……………ああ、いいな」

カラフルな屋根が見えた。自然と零れ落ちた。自然と笑えた。引き返そうか、いや、もう少し歩いてみよう。そう判断させてくれたのはまだ高い位置にある太陽だった。

五分ほど歩いたところで、声をかけられた。フランス語だった。

「ねえ、そのあなた！」

声をかけてきたのはブロンドヘアの女性で、花畑の中から手を振っていた。

「入っちゃだめですよ」

同じ言語でそう言うとな彼女は身振り手振りで驚きを示した。

「大丈夫よ。わたしのお花畑なの。それよりもさ、こっちに来て話し相手になってくれない？」

「……………いいよ」

自由というのは素晴らしいものだとか心から感じながら、俺は返答した。